

PROGRAM

3つのソナタ	ドメニコ・スカルラッティ
ハ長調 ニ短調、ハ長調 (フランスバロックから)	
ロンド風のミュゼット	ダカン
未開人	ラモー
ロンド風のミュゼット	
陽気者	ダカン
ロンド風のリゴドン	
エジプト人	ラモー
嫌らしい気取り屋の3つの高雅なワルツ	エリック・サティ
最後から2番目の思想	
タンゴ	ストラヴィンスキー
ロードランナー	ジョン・ゾーン

メロディア (1979)	細川俊夫
手回しオルガンのボルカ〜	ショスタコーヴィチ
おかしなワルツ〜	
スペイン風の踊り〜	
スプリングダンス〜	
別れのワルツ	
深き淵より (1978)	グバイドゥーリナ

四季のコンサート 春

1994年3月11日(金) 6:45 PM

浜松市民会館ホール

主催：浜松音楽友の会

4才の時からアコーディオンに親しみ、伴典哉、マリアソマ・アロフストに師事した。16才の時に、世界最高のアコーディオン科を持つ西ドイツのトロントン市立音楽院に留学した。翌1973年「クリンゲンタール国際アコーディオンコンクール」青年の部で優勝、また翌年にも、連続で優勝をする快挙を成し遂げた。また、同年には、「アムステルダム国際アコーディオンコンクール」でも、2重奏の部で第1位に輝いた。その後も、ハノーバー国立音楽大ピアノ科で研さんを積み、1981年卒業。同年から、デュースドルフのフォルクワグ大学アコーディオン科の講師となる。日本でも、1977年岩城宏之指揮の札幌交響楽団定期演奏会に出演して、本格的な演奏活動に入り、以後、サンクトペテルブルグ・ホルムホルムのオーケストラ・コンサートをはじめ、意欲的なコンサートが続いている。スカルラッティや、クレーンから彼女のために書かれた新作に至るまで幅広い活動は、注目を集め、毎年の彼女の帰国公演を心待ちにしているファンも多く、クラシックアコーディオンの第1人者として、アコーディオンの世界に限らない広い支持を得ている。

ドイツ在住。

アコーディオンリサイタル 御喜美江 (みき 美江)



御喜美江アコーディオンリサイタル

ドメニコ・スカラッティ (1685 ~ 1757)

ドメニコ・スカラッティは、バロック時代に活躍した作曲家。若い頃はヴェネツィアやローマなどイタリア各地でバロック様式のオペラ、カンタータ、宗教曲などの作品を書いたが、後半生はポルトガルやスペインの宮廷で約600曲のチェンバロ・ソナタを中心に作曲活動を行った。それらのソナタのほとんどがスペインの王妃となったマリア・バルバラのために書かれたもので、古典派への先駆的な特徴を示すロココ風の華麗な音楽である。

ダカン (1694 ~ 1772)

ダカン はバロック時代から古典派にかけて活躍したフランスの作曲家。幼い頃から神童ぶりを発揮し、6歳の時にルイ14世の前でクラヴサンを演奏、8歳で自作のモテットを指揮、12歳になると教会のオルガン奏者となった。その後も各地の大聖堂、修道院、宮廷礼拝堂などで活躍。1727年にはラモーを押し退けて、ある教会のオルガニストの地位についた。カッコウの鳴き声、ツバメの飛ぶ様子などを巧みに表現した描写音楽が有名。主要作品はロンド形式によるクラヴサン曲で、クラヴサンの可能性を開拓した輝かしい技巧的な作品が多い。ミュゼットとはバグパイプに由来する持続低音をもった田園風のフランス舞曲。快活なリゴドンもフランス舞曲の形式名。

ラモー (1683 ~ 1704)

18世紀フランスの最大の作曲家ラモーは、和声学の出発点となった理論書を出版したことにより音楽理論家としても歴史上に名を残した。オペラ作曲家として活躍するのは50歳になってからのこと。1724年(41歳)に出版されたクラヴサン曲集(第2巻)は20曲からなり、8曲目に「ロンドー風のミュゼット」が含まれている。5曲目の「鳥のさえずり」は描写音楽を芸術的なものに高めた作品として特に有名。1728年頃に出版された新クラヴサン曲集は16曲からなり、そこにはラモーの個性が満ちあふれていると言われている。「未開人」は14曲目、「エジプト人」は16曲目におさめられている。

サティ (1866 ~ 1925)

フランスのサティの作品は、本日演奏される曲にも見られるように、奇妙な題名をもつものが多いが、内容的には感情表現を抑えた客観的な音楽である。そうした彼の考え方は、20世紀の音楽が進むべき道を示し、第2次世界大戦後の作曲家たちにも影響を与えた。「嫌らしい気取り屋の3つの高雅なワルツ」(1914年作曲)は、1.彼の恰好 2.彼の眼鏡 3.彼の脚 の3曲からなり、ラヴェルの「高雅で感傷的なワルツ」を意識して書かれたのではないと言われており、反ロマン主義的傾向を示す作品のひとつ。「最後から2番目の思想」(1915年作曲)は、1.牧歌 2.朝の歌 3.瞑想 の3曲からなり、サティのピアノ曲の最後を飾る作品。

ストラヴィンスキー (1882 ~ 1971)

ロシアの作曲家ストラヴィンスキーは、1910年代に作曲した3大バレエ音楽で大成功をおさめた。その激しく野性的な原始主義の音楽は、20世紀初頭の音楽界をリードする役割を果たした。1920年代には一変して新古典主義の方向をめざし、その後さらに作風を変え、1939年に勃発した第2次世界大戦を機にアメリカに渡ったところからは、通俗的な音楽を書くようになった。本日演奏される「タンゴ」は1940年の作曲。こうしてストラヴィンスキーは20世紀の作曲家の中で常に指導的な役割を果たし続けたが、ピアノ音楽は他の分野と比較して作品数も少なく、重要な作品もほとんどない。

ショスタコーヴィチ (1906 ~ 1975)

ソヴィエトの作曲家ショスタコーヴィチは、1927年にワルシャワで開催されたショパン・コンクールで第2位になったことがあり、優れたピアニストであったにもかかわらず、ピアノのための作品は少ない。従って、5つの舞曲が取り上げられる本日の演奏会は、彼のピアノ音楽を知る上で貴重なチャンスである。ストラヴィンスキーと同様に、彼も生涯を通じて作風を大きく変えていった。しかしショスタコーヴィチの場合、そうした変化はソヴィエト政府の体制の変化に合わせる結果となり、日和見主義と批判されることもあるが、それはソヴィエトの作曲家の宿命であったのかもしれない。

曲目解説 須貝 静直